

# 日本文化と宗教

稲岡順雄

## 目次

- はじめに
- 第一章 文化とは何か
- 第二章 日本文化の性格
- 第三章 日本宗教の特質
- 第四章 日本文化と宗教の社會的基礎
- むすび

## はじめに

文化と宗教は極めて密接な關係をもつているというよりも、宗教は文化の有力な一部を占めており、過去においては勿論現在でも極めて重要な位置を占めている。しかも最近最先端をいく宇宙旅行の訓練に宗教とくに禪の効果を再

認識しようとする一部の學者の行動が報ぜられている。また少數の識者は自然科学をもふくめての文化の進展には宗教は欠くべからざる役割をもつていることを強調している。こうような特殊なしかも少數の一部の人々の努力や力説にも拘らず我が國では宗教のになつてゐる役割は次第に奪われつつあり宗教にとつては決して芳ばしい時代ではあるとはいえない。反宗教的立場にたつ人々は勿論宗教に同

情をもつ人々も近代社会では宗教は次第にその姿を地上から没していくであろうと豫想している。

しかるに現實には既成教團は兎に角その偉大な伽藍を維持しており新興宗教にいたつては、信者の激増を誇り壯大な殿堂の建設に狂奔している。しかも宗教的行事や祭禮は各地において復活し壯大化して時には戦前をもしのぐ勢である。この表面的華やかな事實を目にして果して一部の人々が考えるように我が國においては宗教の衰滅の現象が感じられるであろうかを疑わざるを得なくなる。

しかるに一方日毎の新聞紙上に報ぜられている自殺や犯罪、道徳の頹廢などの社會病理現象の激増はこれらを發生せしめる原因はいろいろ考えられるであろうか。そのうちでも宗教はこれらの社會惡の防止に對して一體いかなる意義をもつているか、果してこれらを救済する能力をもつているかということが問題になつてくる。過去において戰爭防止という人類最大の問題に對して一敗地にまみれた宗教が現在このような切實な非社会的行爲の防止や救済にその無能力を暴露するならば宗教は表面の華やかさに拘らず一切の人々が強調するようによいよ地上からその姿を消していかなければならないであろう。

つぎにそれでは一體このような事實は一體我が國のみの特殊な現象であろうか、また、先進國其他我が國より文化

の低い國々にもみられる一般的現象であろうか。ということが問題になつてくる。統計はこのような社會病理的現象は、世界各國にみられる戦後の現象であることを示しているが、我が國においてこのような現象はとくに著しいと考えられるであらう。事實我が國ではこのような非社会的現象は急角度をもつて上昇しつづけており、そのとどまることを知らずこれが對策に爲政者は腐心している。

このような觀點からここでは広義の日本文化に對して宗教は一體どのような位置を占めているか、また宗教の果している役割や機能が日本文化の底流において、どのような効果を發揮しているか、またさきにあげた反社会的反文化的現象を防止して、文化の進展に寄與しているかどうか、ということを考えてみようというのがこの小論の目的である。

## 第一章 文化とは何か

文化の概念、即ち文化とは一體何か、ということは從來からしばしば論ぜられて來たし現在でも人々の關心をとらえる概念となつているが、その意味は決して一樣でない。とくに戦後日常語のなかに文化ということばが濫用され、人間の生み出した最高の價值である藝術や科學から臺所用

具の平凡な日用品にまで使用されてその概念把握をますます困難にしている。

しかし有名なイギリスの文化人類学者タイラーは「文化とは知識、信仰、藝術、道徳、法律、慣習及び社会の成員としての人間によつて獲得された。その技能及び慣習をふくむ複合的全體である」と定義しており、またその流れをくむロキーによれば「文化とは個人が社会から獲得するすべてである。即ち個人が自己の創造的活動によつて、彼にくるものでなく、形式的非形式的類別によつて伝えられる過去からの遺産として来る。信仰、慣習、藝術的規範、食物慣習、技術がこれである。」としさらに「文化とは、科學的な意義においては文化は類まれなる洗練や教養を意味するのでなくして、社會的傳統 (social tradition) のすべてである。それは偉大なる人類學者タイラーが述べたように社会の成員としての人間によつて、獲得せられて、技能や慣習を包含する。文化は、他の方法即ち生物系的遺傳によつて獲得せられた。多くの特性とは對比される之等の技能や慣習のすべてをふくむ」と定義している。

また、アメリカ人類學の父といわれているボアーズは、「文化は一社會集團を構成する。諸個人が集團的個別的に彼等の自然環境、他の集團その集團の他の成員及び各個人が彼自身に關係しての行爲を特徴づける精神的肉體反應及

び活動の總體として定義される。それはまた、之等の活動とその集團の生活におけるその役割の産物を包含する。

しかし之等の生活の諸々の面の單なる列擧が文化を構成するのではない。文化の要求は獨立的でなく、一つの構造 (structure) をもっているから列擧以上のものである。」と規定している。

これらのほかに文化とは生活様式 (way of life) であつて文化はどの社會かの成員のあづかる慣習觀念及び態度の組織せられた集團であるとか、一つの文化とは、一集團の全員もしくは特定の成員があづかる傾向のある生活の爲のニュアンスの工夫の歴史的に獲得せられた一體系であるというようにいろいろの立場から規定されているか。以上あげた種々の文化の概念の規定のなかに共通にみられる重要なことはいづれも文化を社會的集團的なものとみていることである。文化は超個人的である客体であつて、集團のなかの個人の生死にかかわらず存続するものである。ことに文化を生活様式とみる考え方はとくにこのような觀點にたつものである。

従つて、文化はまた歴史的に獲得されたものであるという點に特徴がある。即ち文化は過去からの遺産であり社會的傳統である。勿論文化は人間がになうものであるから文化の奥には生物學的人間があるかしかし生物學の遺傳によ

つて獲得されたものでなく、歴史的経験によつて、獲得された、廣い意味の生活の工天が文化というものである。そこで結局われわれは、より包括的な意味において文化とは、世代から世代にうけつがれる學習によつて、後天的に獲得された行動様式 (way of behavior) あるいは生活様式 (way of life) の總體であると規定することが出来る。そしてこのような、意味における文化は、人間を動物から區別する最大の目じるしであり、従つて文化は人間だけの所有物であり、創造物であることができる。

しかし、ここで注意すべきことは後天的に獲得された人間の行動がすべて文化であるということは、できないということである。それは、ある社會の全員によつて、あるいはその一部によつて、承認され、理解された行動様式でなければならぬ。社會的に全く理解されず支持されず様式化されない行動はその後人だけの特異な行動として文化から區別されなければならない。このことはさきにあげた多くの學者がすべて指摘しているようにわれわれも充分銘記しておかなければならない。

以上のように文化を定義して、つぎにわれわれはそれでは一體、文化はどのような機能をもつてわれわれ人間に働きかけているかを考えてみると、丁度、人間と文化との關係は動物とその本能との關係に對應している。たとえてみ

れば人間はその生存のために生物的本能を失つたと同じ程度において文化を獲得したといえる。本能からはなれて生活しようとするれば、ますます文化に依存しなければならぬようになる。

いうまでもなく、人間は出生以來、一個の獨立した成員になるまでに他の生物に比較して、最も長い期間、保護を必要とする生物である。その期間を人間はもつばら文化的行動様式の學習に費してしるものといえる。

しかし、文化はこのように人間にとつて、ただ單に本能の代用品として、その欲求を充足させることだけを、その機能としてではなく、さらに文化は特定の社會の秩序維持の最も有力な手段であるということである。即ち文化は先天的後天的欲求の充足のみならず、個人の欲求を抑制し束縛し、あるいはただ社會的に公認された手段方法のみによつて欲求充足を認めようとする。解放よりは束縛、創造よりは制限、内的要求よりは社會的期待、さらに個人の好意や不幸とは無關係に社會の統一をつよめるために強制的束縛的に個人に服従を求めるところに文化の第二の機能があることができる。

文化の概念とその機能を以上のように考えてみると、つぎに問題になるのは文化のなかで極めて、重要な位置を占めている宗教の特質とその機能である。宗教をもたない民

族は、ないといわれるほど宗教は文化の普遍的形式の一つである。しかし宗教は極めて古い文化であり、それだけにその具體的形態は複雑多様である。それ故、宗教とは一體何かということをも一つの概念のなかに包括することは不可能に近い。しかしここでは、一應宗教を超自然に關係する人間の心理と行動及び理論と集團と規定して考えてみると原始的自然宗教や高度の創唱的文化宗教其他種々の宗教をもとらえることが出来る。

元來人間存在そのものが合理性と非合理性との矛盾的同時存在してある以上、人々は、兩者の争剋に常に悩まされる。いわゆる人間の生活の危機、即ち感情的緊張状態が訪れると最初は合理的方法によつて、解決しようとしながらそれが不成功に終りその方法では不可能であることがわかる。つぎには非合理的方法によつてこれから逃れそれを解決しようとする。いわば宗教は、人間のもつ欲求を合理的な方法でみたく一つの手段であるともいえる。ことに人間の欲求の最大のもものは、生命の擴充とその安全である。しかるに人間は可死的動物として、地上に生れると同時に悲惨な宿命を負わされている。このような不可解な現象は合理的判断や方法で解決することはできない。ここに宗教の極めて重要な機能の一つがある。このほか宗教は種々の個人的欲求を非合理的方法でみたく、しかしこの個

人的存在は必然的に社會的成員として、集團に保護されるの庇護によつてはじめてその生命を維持し、その欲求を充足することができる。

従つて、また逆に集團自體が意識的に宗教的機能を利用して、その結合強化や秩序維持にとめる場合もある。その理由としては元來人間は集團の利益に反して、個人的な利己的要求にまける動物であり、例えば戦うべきときに戦うことを恐れ、ふれてはならない異性にふれようとする傾向が強くなるような利己的要求を放任しておく、集團生活は破壊されるからである。しかもこのような感情的衝動的な利己的關心に負けようとする個人に対して、理性的判断に訴えてえれを阻止しようとすることは無駄であり、えれに對抗する力もやはり衝動的な非合理的な感力によつて人間に訴えるものでなければならぬ、その力として道德、とくに宗教が利用されるのである。

さらに宗教はこの機能を利用し強化して、合理的な個人的要求をおし上げてまでも社會秩序を維持する非合理手段となろうとする。しかし社會が十分分化せず階級に對立も著しくなく、等質的未分化な原始的單純社會では、宗教はそのまま集團的感情の統一と強化に役立つ。

しかし、階級分化が強まり經濟的貧困に苦しみ文化的生活から遮斷されている、抑壓された被支配階級がうまれて

くると、彼等はこのような段階から脱出ししようと企てる。もしこのような要求が實現されるとするならばそれは直ちに支配階級の利益と衝突することになる。その時、支配者は宗教を利用して、彼等の現世的要求をすてさせ來世の幸福を約束させようとする。

即ち眼を地上から天上に向けさせようとするのであるが宗教自身もまた、天上や來世のことばかりでなく、地上のことにも關心をもつようになる。一般に宗教は神の名において社會秩序を尊重し、支配者の權威に服従し集團的な行動規準に従順であること、また對人間的においては鬭争でなく、和解の精神を守るべきことを説く。このことは現在の秩序を維持し、彼等の地位を回守しようとする支配階級にとつてはまことに好都合の教義となる。

一方被支配階級はこのような宗教的教義をうけ入れることによつて現世的な生活への要求を放棄し、現世に失望して、來世の報償と幸福を期待しようようになる。

このようにして、宗教は現在の階級的社會秩序を固定し、強化することに役立つのである。

## 第二章 日本文化の性格

日本文化の問題をとらえるまえにわれわれはまず日本文

化のおかれていた場である現代文化の特質を一應顧みることも必要であろう。しかし資本主義社會ではとくにそれがたえず動搖し變化がほしいだけにその性格をとらえることは極めて困難である。が現代文化の特色を強いてあげるとすれば、それはいづれも資本主義と機械主義という二つの基盤の上に立つているということである。

元來巨大な動力によつてか動されている大工場の機械的生産は、一八世紀末から一九世紀にかけていわゆる産業革命の結果はじめて可能になつたということが出来るが、しかし資本主義はそれ以前にすでにその體制をととのえており、機械主義はいわばこの資本主義に刺戟され、その胎内から生れたものであるが、現代では資本主義をものり越えて、つきすすんでいる状態である。あるいは機械主義を経験しない資本主義時代が存在したように、資本主義を知らない機械主義も將來あらわれるかも知らないのである。しかしいづれにしても資本主義は現代文化に階級性と營利性という特質を與え、機械主義は文化に畫一性と合理性という特質を與えている。

まづ文化の階級性についてのべると、資本主義制度は、歴史的には、古い封建的支配者に對する新興市民階級即ちブルジョアジーの鬭争という過程をとつて成立して來た、従つて市民階級の利害を代辯し、その要求を擁護し、その趣

味に一致するような文化が観迎され、支配階級のもつ慣習やイデオロギーはむしろ攻撃のまことなつた。例えば、人間の現世的欲求の肯定とその追求個人主義道徳の支持、人間や自然に對する客觀的科學的態度というような價值と理想の實現に努力した。

しかし當時の封建的束縛の打破を叫んでこれと戦い成功して完全に支配權を握つた新興市民階級は、やがて國家權力を背景として、教養と宣傳という武器を用いて一切の人々を除いてすべての文的行動様式に現狀維持という一つの枠をはめようとした、とくに支配權を掌握した一部のブルジョア階級は彼等の特權的立場を擁護するために文化の超階級性を主張したから、その行動は保守的になり、ときには反動的にさえなつていつた。

しかし、被支配階級であるプロレタリアートや一部の進歩的知識人は、支配階級の文化に抵抗して、自己の屬する階級にふさわしい文化を創造しようとして文化の階級性を明白に自覺するようになり、ここに文化的階級闘争がおこる。

さらに資本主義文化の第二の特質としてあげられた營利性も、ここでは明確に打ちだされてくる。元來資本主義はあらゆる生産物や事象はすべて賣買の可能な商品として一應貨幣價值に換算して評價される傾向が強い。學問や藝術

作品もときには思想や道徳さえも營利的打算的性格を附與されて評價される。

そしてこのような文化の營利性は、大衆の欲求に對して敏感であるばかりでなく、反對に大衆の欲求を意識的に新しくつくりだそうとするいわゆる流行現象がこれであり、この傾向が高度化されると、大衆から自發的な文化の選擇能力を奪いつてしまふようになる。

このような現代文化に影響を與えている、さらに一つの力はさきあげた機械主義である。機械の直接の効果は古代的中世的な封鎖社會の垣根を取り拂い世界を文字通り一つの世界に包括するような社會生活の領域を極度に擴大したことである。このように擴大した社會形態によつて物質は勿論精神の機械的生産による文化の畫一化と機械文化にもとづく文化の合理化という二つの結果をうみだした。

即ち畫一化された生産物や商品、精神文化を使用する現代人の生活は個性や民族差を縮少してその生活をますます無差別の方向におしやつている。さらにマス・コミュニケーションの力は魔術の威力は精神や思想の畫一化をも促進している。思想や精神の資困と獨創の欠如は、機械主義が生み出した野生兒であるときえいえる。

このような畫一化とならんで、機械主義のもたらした第二の結果は、その合理性である。合理性とはいふまでもな

く、目的に對する手段や方法を過不足なしに、計算しそれにもとづいて行動する態度である。

そしてこのような合理主義は、まづ能率主義となつてあらわれてくる、そしてすべてのものに能率主義が要求せられ、その努力がつねにくりかえしもとめられる。

そしてこのような現代の巨大な渦巻、即ちさきにあげた階級性と營利性、一性と合理性、という現代文化の流れからおしだされた現代人は精神的にこれと對抗することもできず、それから逃避して社會のめだたないすみでささやかな自己の個性の表現にとめて自己満足にふけろうとする傾向が少くない。

以上概観した現代文化の特質は、多かれ少かれ日本文化のなかに流れている特質である、といつても大きな誤りはないであろう。なんとすれば特殊なゆがみがみられるにしても資本主義及び機械主義の極めて發達した國である。しかしこのような日本に特殊なゆがみが反映して日本の現代文化にも特殊なゆがみがあらわれている。

まづ第一に感ずることは、わが國の歴史的傳統が價值あるものとしてよりも、むしろ打倒し克服しなければならぬ重荷としてわれわれの上はのしかかっているということである。勿論歴史が前進し文化が進歩するためには、古い時代や傳統と意識的に對決し、これを克服するために闘わ

なければならぬ。ヨーロッパでは、市民精神が激烈な闘いによつて、中世文化を打倒し、これによつて社會は革命により、文化は斷絶によつて進歩した。勿論ヨーロッパの近代文化においてもいままなお中世文化の傳統が根強く殘存しているが、それは徹底的に克服されたのち、再び新しい形で即ち新しい時代精神のきびしい批判の眼にたえるような形で復活されて、文化の進展と寄與している。

ところが日本文化の場合には、古い文化に對する徹底的な意識的な闘いは經驗されなかつたのは、丁度徹底的な社會革命が騒動されなかつたのと表裏の關係になつてゐる。

その結果、一般に日本文化は一種の自己満足的な傳統主義のなかで安脈をむさぼり、古い時代意識がそのまま新しい時代になしくずしにうけつがれて來た。従つて日本の現代文化には古代や中世の精神や文化が資本主義文化や機械主義文化といりまじつて、非合理的なゆがんだ形態となつてゐる。

そして古代文化や中世文化は、現代とのきびしい對決を経ないため、現代の眞實の要求にこたえることはできず、ときには強制的、ときには懷古趣味的にのみ利用され結局社會的進歩のための推進力となるよりも、むしろ重荷となつてさえる。

このように重荷となつた文化的傳統をかかえてゐる



國につきつぎ新しい文化が外國から移入される。文化のゆがみは一層甚だしくなってくる。外國文化は最初は必要として、つぎには虚榮的權威主義的態度にささえられて輸入されるが、このような輸入文化は質的にことなつた文化を支持する階層によつてことなつた力の抵抗をうける。とくに文化度の低い階層から強い抵抗をうけてゆがめられ、その結果、輸入文化はそれ自身の同一性を失い、あらゆる面で卑少化され、歪曲されてあらわれるようになる。それとともに、一方では外國文化と日本文化の妥協即ち折衷主義があらわれ、それが物質面のみならず精神面にまであらわれて、日本文化の内的な構造の脆弱さをしめしている。

このような日本文化の脆弱さは、その内部に巨大な斷層となつてあらわれる。とくに文化人知識人と一般大衆との文化的斷層、あるいは都市と農村との斷層となつてとくに著しい。そしてこのような文化的斷層やその跛行性は、植民地的雜種文化の續出となり、そしてここに深い劣等感があらわれ國民全般を苦しめている。

それとともに敗戦を契機として、經濟的困亂と精神的動搖はかれら自身の思想と力に對する信頼を喪失させ、その結果自主的な精神をうしなわすようになった。そこで彼等は何か彼以上の力をたよることによつて、解決しようとした。そして彼等は宗教的機能を薄弱にした既成宗教によつ

て救済されるよりも非合理的現世主義につらぬかれた新宗教の門に殺到したのである。

### 第三章 日本宗教の特質

一見日本は實に宗教の盛んな宗教國である。一部の知識人や學生、あるいは急進的な社會主義者を除いては、一般大衆は依然として宗教に多大の關心をいだき、その必要性を感じている。

このような事實が多數の宗教團體とそれに附隨する尨大な宗教施設となり、また國民の總人口數を上廻る信者數となつてあらわれている。

また日本は表面上はともかく佛教國であり、國民の大部分は佛教徒であるといわれているように各家庭には佛壇を安置して佛像や祖靈をまつり、一般に佛教の方法によつてその祭祀儀禮を取りおこなつている。また一方では、民族的性格のつよい神道に屬する神社信仰を通じて、各家庭ごとに神棚を設けてこれを日夜崇拜しており、死亡以外の出生、結婚その他の通過儀禮の大部分は神道的方法によつておこなつているのが一般である。さらにこのような創唱の宗教や國民的宗教以外に自然宗教的俗信や民間信仰にも關心をもち、家庭内のみならず路上においても雜多な夥たらしい諸佛諸神や諸靈その他の宗教施設を安置している。

さらにこれら在來の宗教のみならず明治以來、とくに第二次大戦後は西歐の宗教でありキリスト教もその資力と熱烈な傳道力によつて、次第に知識人や上層部の人々の關心をひきつつある。しかもこれら複雑な宗教現象のなかでも最も注目すべきことは、新宗教いわゆる新興宗教の極めて目覺ましい發展であり、その強力な組織力と巧妙なしかも狂的な宣傳力は我が國民の宗教生活にある意味での變革を興えつつある。そしてこれらの新舊を問わない種々雑多な諸宗教はそのうちに多少の消長はあつてもそれぞれその大殿堂や大伽藍を維持し、しかも時には新しい大宗教施設の建設さえ行われているのが日本の宗教的現實である。そしてこのような夥だしい宗教施設とそれに従事する多數の宗教家はかなり熱心に宗教活動に働いている。

それにも拘らず、國民の宗教生活は依然として低調であり、それに伴つて道義の頹廢が嘆かれている。

それではなぜこのような、精神上の缺陷が埋められず、その向上が期待されず、また宗教のもつ重要な機能の一つである道徳意識や内面的罪惡意識が樹立されず却つて日本の現代文化の跛行現象即ちゆがみを推進する一翼を宗教が擔つているかを明確に追求することが必要である。そのためには、われわれはまづ日本人の宗教生活の現實をあくまでも實證的に把握しなければならない。

この問題については、最近新興宗教の著しい發展とそれに伴う日本宗教の混亂が多くの學者に注目され、これらを実證的に解明しようとする傾向がよまつて來ている。いまこれらの諸論を要約すると、つぎにあげる諸點を指摘することができる。

その第一は、我國の宗教狀勢は著しく重層的である、といふことである。いわゆるシンクレティズム (syncretism) 即ち多重信仰の傾向が極めて強いことが著しい特色となつている。個人においては勿論、その個人を成員として成り立つている集團自體もこのようなシンクレティズム的宗教狀態に對して、極めて無關心である。このことは宗教以外の文化についても十分いえることであり、當然かなりな鬭争と矛盾撞著をおこすべき異質の文化が何等の抵抗もなく安易に妥協し、折衷して何等怪しまれないということは宗教においてはことに甚だしい。他民族では、當然流血の鬭争をもひさおこしかねない異質の宗教が極めて平然として並列し、またこれを受入れる個人自身も一人格のうちに於いて諸種の宗教を信奉して怪しまない、いわば宗教的無恥、無節操とでもいふべき信仰形態がわが國の宗教的特質として最初に指摘されるべきである。

第二にあげられることは、我が國において宗教を信仰しているもののほぼ半數は、形式的に、あるいは習慣的に佛

教を信奉し、佛敎行事を行つてゐることが明らかにされてゐる。即ち積極的に宗教を求め、自發的に自己の信仰を確立するといふのでなく、與えられたものに順應する、受身の態度が日本人の宗教信仰の大きな心理的支柱となつてゐるということである。とくに家の傳統的習慣と社會的強制によるものが大部分であり、深遠な攝理や哲理は一般大衆には無縁なものとなつてゐる。このような事實は我が國にのみ限られた特質であるとは云えない。文化の低い民族では勿論、極めて高い文化をもつてゐる民族でも、このような特色は多少とも見出されるであらうが、我が國ではこのような傾向が極めて強いという事實は、何人も否定することはできない。

さらに第三には、我が國の宗教信仰においては、現世利益の傾向が強いことである。宗教におけるこのような功利的側面は、必ずしも我が國のみならず世界の各民族の宗教にも多少とも認められる傾向であるか、我が國の大衆の宗教生活においては、とくに著しい特色となつてゐることである。一口に現世利益といつても、その目的は人間の欲求によつて種々雑多であるが、そのうち最も大きな部分を占めるものは病氣である。自分のみならず肉親、知人の病氣はすべて肉體的苦痛や死の恐怖として、とくに貧しい大衆には、生活苦の前提となつてあらわれてくる。従つ

て貧しい大衆や科學的療法に不信をいだく人々は、極めて容易に宗教的方法によりかかる。現代の新興宗教の發生やその發展の最も大きな原動力の一つはこのような病氣に對する現世利益的祈禱であつた。

さらにまたこのほか、貧苦や不和鬭争をさけて、一家や個人の平安と幸福を願う心情も強く、我が國の宗教を現世利益の方向へおしやつていゝ。ことに生業の破綻からくる精神的物質的苦痛へのおそれを、反對に積極的にその成功と發展を祈る心情が、現世利益の宗教を要求するようになる。

第四には、我が國の宗教は著しく呪術的である、ということである。これはアニミズムやシャーマニズムと關連して、東洋の宗教の顯著な特色となつており、上述の宗教による現世利益の多くも、これと表裏一體となつてゐる。そして、病氣に關連して、その平癒を宗教によつて達成せんとし、貧困や不和を信仰によつて脱出せんとする意欲は我が國での宗教生活において、とくに著しいといえる。

以上あげた日本の宗教の諸特質をもとにして、現實の日本人の宗教生活をながめてみると、そこに極めて複雑な様相が見出される。

即ち我が國の代表的宗教である、神道は勿論佛敎もその多くは古來からの民間信仰であつた、祖先崇拜や死者崇

拜の觀念と結びつき、曖昧な祖靈觀念としての「死者」や「ほとけ」のたたりやさわりを回避し、それを宥和せんとする要求が強く、いわゆるお抜や讀經、おまつりなどの儀禮は、すべてこのような目的のもとに行われているといつても過言ではないであらう。たとえ、祖先や死者の冥福を祈り、また報恩、感謝の念から行われた禮拜であつても、その奥底には祖先や死者の呪咀や怨恨やたたりに対する恐怖心が潜在していることは否定出来ない。

このような日本人の宗教生活と、その心的態度に照應する宗教的對象、即ちいわゆる我が国の神祇觀念も極めて不明確であり、西歐にみられるような絶對的超越神の存在の觀念は極めて稀薄であり、例えば死者も時には「神」となり「ほとけ」となつて、人間に超越した存在として受取られ、その力は人間に幸福を與えるものと考えられておりながら、一方では儀禮を媒介として、人間が或程度支配しうるものであると考えられている。また多靈的多神的神祇觀により、人物神あり、自然神あり、機能神ありなどで人間の欲求によつて要請された、諸神、諸佛や外來宗教によつて移入された神祇などが混交して、實に複雑な様相を示している。

それではなぜ、日本人の宗教生活が絶對的超越的な一神教的信仰に培われた他國人には奇異に感じられるほど、重

層的に混亂したかの原因を考えてみなければならぬ。これに對しても、從來から種々の要因が數えられている、例えば日本人の精神生活と自然的矛盾、即ち風土との關係とか、あるいは、その精神生活と思维作用との特殊性、または、中世以降近世における歴史的社會的影響による日本人の宗教思想の特質などの觀點から取上げられて考察されている。

しかしわれわれはここではとくに、日本の社會的環境の特殊性がいかに日本人の思考作用に變化を與え、それがいかにして日本文化をうみ出し、そしてその文化の一端としての宗教思想がいかに影響したかに焦點を向けて考察するであらう。

#### 第四章 日本文化と宗教の社會的基礎

現在の日本社會は、その社會的經濟的構成からみて、資本主義社會であるということは何人も異存はないであろうし、また社會の全體的構造からいつて近代社會であるともいえるし、人間の結合關係から考えて市民社會であるともいうことができる。しかし日本社會の表面のみならず、その底流を取上げて熟視してみると、資本主義社會であることは論をまたないが、眞の意味での完全な近代的市民社會であるということはできない、ほどいまでも封建的なもの

が濃厚にのこつてゐる非近代的社會である。

このように日本の社會は、資本主義社會であると同時に封建的であるといつても、必ずしも誤りではないであらうが、勿論資本主義社會が發展するにつれて封建的性格は次第に拭いさられていくであらうか、かく資本主義の成立が市民階級としての中産者の發展という過程をたどらず、貴族や地主、商人などの上層の人々によつて、市民革命が行われる場合とか、外國の資本主義の刺戟によつて未成熟のまま支配者や政治權力によつて、資本主義社會をつくりあげて行く場合には、封建的要求をぬぐいさらず、かえつてそれを残しておくほうが、資本主義の發展のために有利の場合がある。しかしそのまま放置すれば、資本主義の發展とともに自然に封建的なものは崩壊していくので、ときにはつよい政治的制約によつて近代社會の正常な發展を阻むようにしむける。このようにして資本主義の發展が歪められた國では、資本主義社會でありながら人間の社會結合は前近代的性格のままにとどまり、近代化が展開しないようになる。日本社會は、丁度このような型に屬しているものであるといつても、決していいすぎではないであらう。ことに我が國の資本主義の發達の過程をふりかえると、このことは明らかである。

明治維新は、日本にとつては物心ともどもの一大變革で

あつた、しかも列強は、すでに大部分は資本主義體制を整え、我が國に大きな壓力を加えていた。この場合、日本の支配者のなしたことは、急速な富國強兵政策であり、いかなる障害をものりこえて、先進國に追いつくことであつた。即ち國內では、上からの資本主義體制えのきりかえ國外では武力による隣國の征服、このようにして我が國の資本主義的近代社會の出發は、第一歩からゆがめられていたということが出来る。

そしてさらに我が國の社會は、その奥底に封建的な性格がつよいばかりでなく、その基底に家族主義とでも呼ばれるべきものをもつてゐるところにその特質がある。これは東洋社會が一般に家族主義的社會であるといわれるように個人よりも家族を社會の單位とし、従つて社會結合一般にも家族的な人間結合が擴大されているという例外にもれず我が國においても、親子的な身分結合であると同時に、主從的な身分結合であるということが出来る。そこでわれわれは、このような社會關係を封建的家族主義と呼ぶが、これが我が國の社會的性格であるといえる。

このような事實は、我が國の特殊な自然環境によつて、家族労働にたよる非資本主義的な過小經營のおこなわれている農村には、いまだに著しくあらわれているところであり、また中小商工業者にも或程度その傾向が強く、最も近

代的であるべき、大企業體制のなかにある資本家と労働者のなかに、やはり家族主義的な人間関係がもちこまれてくる。さらにまた、政治の單なる行政的事務を司るべき技術者である官僚自體が大きな權力を把握している我が國では、その結びつきは親分子分關係を濃厚にし、このような性格は、官僚にむしろ支配されているような政黨においては、著しいし、最も進歩的近代であるべき文化人や知識人によつてつくられている、文化團體や學問界においても、このような封建的家族主義の性格が皆無であるとは、決していえない。そしてこのような封建的家族主義という前近代的性格のなから自然に生れ育つてきた人爲的集團が、いわゆる博徒集團であり、今日でも一種の暴力團體として社會に大きな勢力をもちつつある所以も日本社會のこのような特殊性によるといえる。

さらに戦前では、天皇制と結びついて家父長的家族制度をとり、直系的家長的家族の原理と、總本家的皇室の原理とは全く同一視され、従つて我が國では、社會の集團構成の最小單位である、家族と最大單位である國民とが一つの原理によつて結ばれており、その間にある多くの社會集團もこのような原理によつてつくりあげられていたものといふことができる。そして少くとも、敗戦まではこのような前近代的身分的な封建的家族主義を維持し、存續させてい

たということが出来る。

このような日本社會の特殊性は、當然そこに生れる。文化とくに宗教や道徳に大きな影響を與へざるを得ない。即ちこのような封建的家族主義の社會では、その具體的な對象として、まづ「家」を重視した。この「家」を重視する思想は、極めて根強く殘存し、最近にいたるまで日本人の實踐を有力に支配し、眞の個人の自覺を促す個人主義よりも家族主義的であつた、これと古來よりの民族であつた神道が結合して、家の祭祀、とくに祖先崇拜の宗教思想を育成した。

そして、外來の宗教や思想を攝取する場合にも、この規制からはなれず儒教の場合は勿論、佛教においても家と結びついた祖先崇拜の宗教思想と混融することにおいて、民衆一般の宗教として、ひろまることができた。従つて家族や國家を超えた次元にたつ普遍的宗教としての佛教は、日本獨自の家族原理と矛盾することなく受容せられこれによつて、現代にまで命脈が保たれているのである。そして家庭においては、佛禮のなかに祖先の位牌を安置して、近い祖先や死者と結びつき、その周邊にまつる神棚において、遠祖に結びつくという、實に奇妙な我が國獨特の信仰形態をつくりあげたのである。

このように、儒教や佛教などの外來宗教の受容の場合に

も主從的身分的家族主義の社會秩序を打破せず、むしろこれを強化する方向に受入れられたのであり、これがさらに封建時代になると、そのうえに恩や義理、獻身の道徳に裏づけられて近代にいたつても、ついに自由主義にもとづく個人の觀念は殆んど現われずに終つた。即ち罪惡感にもとづく自主的な深い人間性にふれる宗教は衰え、表面上の恥辱感にもとづくみせしめの宗教、あるいは現世利益的呪術的宗教、あるいは單なる家の宗教としてのみ一般大衆に受取られるようになったのである。

そしてこの結果、日本においては、宗教は人間の魂の根底にふれる崇高な精神現象でなく、單なる處世術の一種、あるいは形式的社會的慣習視されるようになって來たのである。この事實は古代や中世は勿論、とくに近世において日本では宗教が常に宗教以外の世俗的權力によつて左右されてきたことによつて明らかである。とくに徳川幕府の宗教政策とそれを觀念的に受けついで明治政府の宗教に對する政治的態度においても、常に爲政者が宗教の權威と尊嚴を認める代りにそれを利用し懐柔し、時には抑壓するという過程を繰り返していたことが、今日本の日本宗教の混亂をひきおこした最も有力な原因の一つがある。

## む す び

日本の社會は、現在大きく變動しつつある。それとともに文化も混亂しながら進展している。そして或程度社會が固立するとともに、恐らくそれにふさわしい文化が産れるでさう。そのとき文化の有力な一翼をなす宗教は、どのように變貌しているであらうか。果して現在の既成の諸宗教はこの新しい文化に即應して、その機能を發揮するであらうか。あるいは全く異つた新しい宗教が要求されるであらうか。宗教人であり、また宗教に多大の關心をもつたわれは、現在この問題に眞剣に取組まなければならぬ。

そのためには、いたづらに受動的に時代の流れに處するのではなく、積極的にわれわれの側から、社會の動向と文化の變動をみきわめて、一體どのような宗教が生き残るか、また將來生きのこるためには、現在の宗教、とくに既成の佛教教團はどのように行動しなければならぬかを充分科學的に究明することが必要である。

以上のような重大な問題を解くためには、この小論は餘りに貧しいものであり、また論文としての體裁を十分整えたものとはいえないが、筆者が常日頃考へている一端を限られた紙數に表明して識者の批判を乞う次第である。

### 参考文献

#### 第一章の文化の問題

松本潤一郎『文化社會學原理』 棚瀬讓爾『文化人類學』

堀喜望『文化人類學』杉浦健一『人類學』

第二章の日本文化には、諸種の雑誌論文を参照したが、とくに、中村元『東洋人の思维方法Ⅱ』、和辻哲郎『日本精神史研究』、新潮社『日本文化研究』、加藤周一『日本文化の雜種性』（思想一九五五・六）、ルース・ベネディクト『菊と刀』を参考

第三章日本宗教に關しては、小口偉一『日本宗教の社會的性』、佐木秋夫、小口偉一『創價學會』創文社『現代宗教講座第五卷』、日本人の宗教生活『河出書房』新心理學講座、宗教と信仰の心理學『佐木秋夫』思想第四一〇号、神佛の信心の内容と性』などを参照

第四章のためには、川島武宣『イデオロギーとしての家族制度』、『日本社會の家族的構成』瀧川政次郎『日本社會史』中村吉治『封建社會』、『日本社會概説』、『日本社會史』福武直『日本の社會』、『日本農村社會的の性格』などを参考とした。

### 執筆 者 紹 介

伊藤 古鑑氏	花園大学教授、佛教學擔當
荻須 純道氏	花園大學學監、教授、佛敎史學擔當
大井 際斷氏	花園大學教授、禪宗學擔當
市川 白弦氏	教授、佛教學擔當
柳田 聖山氏	教授、佛教學擔當
稻岡 順雄氏	教授、宗敎學擔當
木村 靜雄氏	教授、禪宗學擔當
大石 守雄氏	助教授、佛敎史學擔當
柴田 增實氏	講師、宗敎哲學擔當
二階堂順治氏	禪文化研究所員